

ジョージ・H・ミードの「論議領域」概念の シンボリック・インタラクショニズムへの接合を再考する ——普遍志向が文化多元主義へと移行するとき——

鎌田大資*

Re-interpretation of the Intersection of George H. Mead's Concept of 'Universe of
Discourse' with Symbolic Interactionism
—On the Transition of His Universal Orientation to Multi-Culturalism—

Daisuke KAMADA

ミードの論調と、シンボリック・インタラクショニストのエスノグラフィのあいだにある距離について、論者の感じている疑問は他の研究者にも共有されうるものだろうか。そもそもシンボリック・インタラクショニズム (symbolic interactionism, 以下 SI と略記) は日本では大衆社会批判の文脈で紹介され、一種の批判理論のように、構造機能主義や、それに由来する社会体系論への対抗言説として言及されがちだったようである (船津 1976 など)¹⁾。しかし、社会学 (sociologie) という言葉がシイエスによって世界ではじめて紙のうえに書きとめられ、オーギュスト・コントが印刷物で言及して以来、アメリカのシカゴ大学で最初に専門学部を設置して、一つの研究分野としての制度化がなされてからの歴史をひもとけば、初期シカゴ学派において模索された量的、質的社会調査のうち、主に質的な部分を担う調査の潮流として、多数のエスノグラフィが執筆、公刊され、今に伝わる実証的、理論的、実演的 (performative) な調査技法の一流派としてそれは現存している (鎌田 2015, 2015a)²⁾。ミードは哲学者なので、具体的な社会現象についての調査指針を残していないことは当然だが、それにしても調査の技法や実践と無関係に、ハーバート・ブルーマーがミードに基づいて書きのこした SI の基本理念について、ミード思想のディテールに照らしてその正当性をめぐる論争への言及は絶えず、おそらく日本の SI 研究者の活動のかなりの部分も、ブルーマーによるミード思想の継承に関する論争をフォロー、判定することに費やされたのではないだろうか。

論者はそうした日本の研究動向には関心がなく、むしろ初期シカゴ学派から現代社会学全般に引きつがれた調査実践の蓄積、そしてそのなかでもハワード・ベッカーやアンセルム・ストラウスが主導し、ノーマン・デンジンがかれらとも独特な距離を取りながら推進した実証的、解釈的研究としての SI のエスノグラフィに注目してきた (Becker 1970;

* 人間関係学部 人間関係学科

Strauss 1991; Denzin 2000=2006など)。ベッカーたちが集団パースペクティブといった概念を新設することで、卓抜な視点からミード理論を調査に応用した業績 (Becker et al. [1961] 1977) は端倪に値するものの、その展開を支える文言がミードの著作に見られるかと精査したところ、公刊された著作からはその痕跡は発見できなかった³⁾。

SIのエスノグラフィや、ミードの在任中、また没後刊行された講義録、遺稿集の出現のところに公刊された初期シカゴ学派の著作を意識しながら、ミードの業績を再検討する視点をもつ研究者自体が日本では少数であり、本稿で展開する考察の問題意識に共感していただける方も少ないだろうが、初期シカゴ学派の研究史における盲点を究明する論者の試み (鎌田 2016, 2017 など) の一環として、本稿をあわせ読んでいただければ幸いである。

1. 哲学者としてのミードがヘーゲルから継承したもの

ミードは社会学、特にシカゴ大学出身者のあいだで広くおこなわれた SI の基本的アイデアを提供したとされる哲学者であり、ウィリアム・ジェームズやジョン・デューイに師事したプラグマティストとして、社会学のみならず哲学や社会思想全般における見直しも進んでいる (Joas & Huebner 2015 など)。その没後に編纂されて代表作となった『精神、自我、社会』 (Mead [1934] 2015=1973, =1995, =2018) の素材とされた 1928, 1930 年の「上級社会心理学」の講義録以外にも、シカゴ大学で教鞭をとる哲学教師として、カント、ヘーゲル、ライプニッツその他、多くの先行哲学者についての講義録が残され、没後に企画された著作のなかには、『現在の哲学』『19世紀の思想動向』『行為の哲学』 (Mead 1932=2001, 1936=1994, 1938) 以外に、そうした講義録も編集して公刊する計画があったという⁴⁾。

ただし近年、ミード晩年の講演録から、イギリス経験論において、自身の感覚与件となっていない世界の、実在を疑う懐疑論を主張したジョージ・バークリーについて語っているところ (Mead 1929=2021) を手がかりに、『19世紀の思想動向』 (Mead 1936=1994) を再検討したところ、ミードがカント、ヘーゲルを高く評価しながら、自身の社会的自己論の起源をフィヒテとシェリングに見いだしていることを再発見し、彼らの著作から晩年のミード自身の問題意識を再構成できるのではないかと思いついた。ヘーゲルについて深く学んだミードが、『精神現象学』 (Hegel [1807] 1907=[1966] 1997, =1998) のリメイクとして、児童の発達理論を構築した自身の学説を社会的自己論として展開したあと、ヘーゲルの『法の哲学』 (Hegel [1822] 1970=2000-2001) などの国家論、国家主義イデオロギーを行きすぎとして、フィヒテの『自然法論』 (Fichte 1796=1995) などの社会思想に戻り、またその知識学、『ドイツ国民に告ぐ』 (Fichte 1808=2014) の国民形成への清新な呼びかけの地点に戻って矯正、修正しようとしていたのではないかと推測した⁵⁾ (鎌田 2021)。本論では、ヘーゲルの『精神現象学』とミードの関連性を調べ、ミード自身により、常時、言いあらわされている universe of discourse⁶⁾, universal discourse に関する普遍志向的な考え方を検討し、アインシュタインの相対性理論の発表によりニュートンの絶対時空座標の考え方が不可能になった事態を受けて、普遍志向が修正された文言がないかと探索する。そうした修正文言が見いだされれば、シカゴ学派社会学での地域や職業、そして非行少年や犯罪者たちの逸脱下位文化などを個別に研究するエスノグラフィの展開の、理論的根拠

のひとつと見なしうる。具体的には、ミードの講義の速記や受講ノートを基に学生の期末レポートとしてまとめられた草稿類に、その萌芽が観察される可能性がある。

まず精神、自我（自己）⁷⁾、社会という3概念を同一視するような視点をミードやヘーゲルが持っていることを、シェリングの同一哲学風に文献提示する（Schelling 1856-1861, 2006-2011）。シェリングの場合、神の被造物は神の創造行為の痕跡がとどめられている点で神の一部と見なせるという暗黙の理解（直観）にもとづき、自己やその周囲の自然現象に沈潜することが神やその思考、行為について洞察を得る手がかりになるという神秘主義的な思想を展開している。同様に精神はその周囲の共同体に生まれ、相互作用のなかで生態学的（ecological）に形成されるといった思想を、ヘーゲルもミードも語っている。その過程で、一見、論理的に相反するものを同一視する矛盾許容論理が駆使され、アリストテレス以来の伝統的論理学の排中律が成り立たない状況を招来するが、これは「自己」のような人間の内部と外部を仲介する境界領域を設定して論じるうえでは、避けて通れない（出口 2008）⁸⁾。すなわち、精神と自己と社会は、社会的相互作用のなかで精神や自己がはぐくまれるゆえに一体であり、そうした一体性を離れて考察されることはない。

以下、先行思想家としてのヘーゲルの哲学の諸要素をミードが換骨奪胎して摂取している様子を検討する。ミード、ヘーゲルの分裂した自己観は、彼らに先行するフィヒテの知識学から引きついだものだろう。フィヒテの思考において、自我には絶対者に規定される客観としての側面と、絶対者自身を進んで受け容れる主観的側面が両立し、主観でありながら客観でもあり、その逆でもあるという矛盾許容的な捉え方がすでに前提されていた。

ミードの場合、I と Me が社会的自己の二つの局面である。相互作用のなかで他者が自分をどう見るかにかかわり常に自覚する Me と異なり、思いもかけない行為、言動のあとで自分にこういう面もあるのかと自覚して知る I を、事前に意識することはできない（鎌田 2021）。

ミードの自己は社会的経験のなかで生じる社会的構造とされ⁹⁾、精神も組織された反応となっており¹⁰⁾、いずれも社会的相互作用のなかで発生し、精神は自他の相互作用の集積、すなわち文化や歴史を含めた社会資本や資源の集積そのものと考えてよいと思われる。それを「一般化された他者」、すなわち集団や社会での一定の反応や受け答えのパターンとして学習するのが、人間の子どもの発達と呼ばれる過程である。ミードの自己は I と Me という2局面をもつものとされるが、これはフィヒテが知識学で das Ich の主観的側面と客観的側面の分裂として描きだしたものと同様で、そのままヘーゲルにも踏襲されている。あとで概観するように、ヘーゲルは若き日に年下の友人シェリングとともに、カントに触発されて知識学その他の論考を発表して話題になっていたフィヒテを、批判的に摂取して思想形成し、フィヒテの知識学の基本構図はヘーゲル哲学にも引きつがれている（鎌田 2021）。

たとえば、ヘーゲルにおいても自己像は二重に分裂しており¹¹⁾、ただしその分裂は常に統合されて次の段階に向かう運動として示される¹²⁾。絶対的精神が歴史を背負った共同体として示され¹³⁾、それは世界史とされる（196=上, 338）。そして世界史は絶対精神の自己展開とされる。となっている一節である。これらの例から、ヘーゲルの段階でも精神（Geist）が、集合的、文化的、歴史的なものとして捉えられていることが分かる¹⁴⁾。

2. ミードの普遍志向

哲学、特に大陸のドイツ観念論においては神学の伝統に基づき、神の属性とされる一般性、普遍性が個別性、具体性よりも優先され¹⁵⁾、実証科学を標榜してきた社会学のように個別具体的な諸事実から積みあげて普遍的な法則を見いだそうとする方向はとらない。イギリスの経験論には、個別具体から積みあげて法則化する方向性が存在するが、ドイツに留学した経験もあるミードが依拠しているのは、むしろ大陸の観念論の伝統であり、彼自身にも具体的な話題から、突然、普遍的な概念に議論が飛ぶ傾向が観察される。

ミードは、相互作用のなかで共有される意味を与える働きを普遍的と呼ぶ。もし過去に意味が確立した事象を学習したうえでその意味を利用する場合には、そのシンボル使用が持続した歴史の分だけ、それは普遍的といえるかもしれない。ただしミードらプラグマティストがよく話題にする「問題状況」では、創発する新規な事象をまえに、各種の意味づけが一定数の人々に共有されるまで、一時的、場当たりのにつけられた名称が、相互作用の場に限定されたままで使用される。そして実社会では常に問題状況が発生する。したがって、シンボルに現場での具体的、便宜的な通用性しかなく、普遍性が欠けている多数の事例が観察できるだろう。

One can isolate the red just as a sensation, and as such it is passing; but in addition to that passing character there is something that we call universal, something that gives a meaning to it. (12-1)

この部分では相互作用のなかで有意味シンボルの意味が共有された場合、それは普遍的なものと考えられるという言い方をしている。そして、ミードの思考の中で、一つの意味作用に付与された普遍性は一挙に無限定に広がる普遍的言説 (universal discourse) へと拡大されうるものとなる。

In so far as the individual indicates it to himself in the rôle of the other, he is occupying his perspective, and as he is indicating it to the other from his own perspective, and as that which is so indicated is identical, it must be that which can be in different perspectives. It must therefore be a universal, at least in the identity which belongs to the different perspectives which are organized in the single perspective, and in so far as the principle of organization is one which admits of other perspectives than those actually present, the universality may be logically indefinitely extended. (12-12)

ここでも他者同士の異なったパースペクティブのなかで同一の意味が共有される場合、それを普遍的という表現されている。また普遍性 (universality) が論理的には無限に拡張されうる点にも注目すべきであり、本論の補遺で述べるような理由で、ここでは論議領域 (universe of discourse) 自体が、無限に拡張されて宇宙 (universe) 全体を覆いうるようなものとして考えられていると、論者は解釈する。この場合、通常の相互作用のように従来から使われている言葉の意味を学習し使いこなしているのであれば、文化的に共

有された規範として、一定の幅に収まる意味も共有されるはずという前提があるように思われる。ただし、プラグマティズムで常に想定するように社会には常に新規な事象が発生し、それを問題状況とし集散的に解決が模索される場面では、共有された文化的資源、資本では不十分である。それゆえ新規な状況が全体社会的に広く共有されるまでは、その相互作用の場で模索された解決法や振舞い方はその場特有の個別具体的なものとどまり、普遍的なものとは見なしえない。

3. ドイツ観念論のプログラム——啓蒙主義への回答として

ここではミードの議論の前提となるカント以来の観念論の流れを概観する¹⁶⁾。

カントの3大批判 (Kant [1781, 1804] 1971=2014; [1788, 1790] 1968=1957, =1964) のうち、最初の『純粋理性批判』では神の属性とされる無限、永遠、全能などの属性についてアンチノミーを列挙し、論理的操作ではそうしたものがありうるとも、ありえないとも断定できないと論証した。こうした論理的操作をおこなう能力は悟性とされ、神の存在を前提に導きだされる多くの事柄について考える能力を理性（超越的な絶対者に関する判断を前提とした超越論的理性）として、悟性によっては判断できない事柄は、理性を用いて考察する方針をカントは打ちだした。

ユダヤ教からキリスト教に受けつがれた唯一神は、善意を持ってこの世界のすべてを創造し、世界に存在する万物は神の創造の刻印を帯びていると考えられる。したがってその一部である哲学者の自己もまた神の創造の刻印を帯びており、神やその創造行為について考える材料を自身のうちに持っている。ローマ帝国の国教となったキリスト教の教会は、ローマ市民や帝国民の倫理道徳を管理する任務、すなわち風俗統制（罪、特に軽犯罪、礼儀作法などに向かう考え方の監督）と、皇帝の勅令を集積しローマ法として管理する司法機関の役目を引きうけた（森本 2018）。それゆえ、キリスト教の教会が監督してきた倫理道徳に従うことは神に従うことであり、神は自由に善意を持って世界を創造した以上、神の意志に従い善行の義務を果たすことは、被造物である人間としても自身の善意に従い自由を行使することと等しい。実践理性にしたがって自由に義務を果たして良いおこないをする実践倫理を論じたのが『実践理性批判』であり、その後の『判断力批判』では、芸術や美の観念を論じたあと、物理的世界や諸生物の生理的機構の隅々を満たす神の知性の精緻なはからい (intellectual design) を論じ、神の存在を傍証している。

こうした自然の精巧な機構の成りたちに関し、その後の科学の進歩によってある程度までは、神の存在によらない説明が可能になったが、調べれば調べるほど不明な部分が増えることは否定できず、現在においても神の創造行為を仮定し、それをおこなった偉大な神を信仰する余地を認める人に、教会通いをしている論者はよく出あう。カントはその論証において、神という言葉はあまり使わずに絶対者や無制約者と呼ぶ存在を論じているが、これは自己流の解釈を施して神という言葉そのまま使い教会から咎められることを避ける工夫だろうし、その工夫は後続の観念論者も引きついだ。

フィヒテ (Fichte [1845-1846] 1971, 1995-2016) は、『純粋理性批判』の理性の考え方を受けとめて、絶対者に規定され、また自分の側も絶対者を進んで自由に規定する絶対的自我について論じ、そこで自我や絶対者について得られる知識を追求する知識学と呼ぶ学問

分野を提唱した。そして無神論論争として彼がイエーナの大学や教会に対して展開した筆禍事件において、自身の神は道徳的世界秩序だという考えをフィヒテは表明した（Fichte 1798=2010など）。すなわち人間が文化を発展させるなかで、身につけてきた道徳意識が成立させる社会の仕組み自体が、神であると定義した。ということは人間が作りあげる文化や文明自体を神の現れと見てそれが人間を規制し、その規制に自由に自分から進んで従う義務を果たすことが人間の務めと考えることになる。ここでは、プラグマティストの、問題解決に当たり最善の結果を目指して試行錯誤する実践道徳と近いものが、表明されている。またフランス革命からナポレオン戦争へというヨーロッパ社会全体を巻きこむ社会動乱のなかで、フィヒテはフランス革命の原動力となったシイエスのパンフレット『第三身分とは何か』（Siyès 1789=2011）をドイツの知識人に紹介する役割を果たし、分邦国家としてナポレオン軍に蹂躪されるドイツの現状を嘆いて、『ドイツ国民に告ぐ』（Fichte 1808=2014）を発表した。これはシイエスが生みだした国民主権の発想に自身の知識学のエッセンスを加え、その知見やドイツの教養に基づいた国民統合を呼びかけるものとして、フィヒテ版の『第三身分とは何か』に当たる作品ではないかと報告者は考える（清水 2013）。

フィヒテに刺激を受けて、神に創造された自然の側に力点を置く自然哲学を構想したのがシェリング（Schelling 1856–1861, 2006–2011）だが、彼は神の被造物として自然、人間、主観、客観のすべてが同一であるという同一哲学に進み、さらに芸術哲学、宗教哲学として思想を展開した。その同一哲学期に、若き日の盟友だった年上の友人のヘーゲルの『精神現象学』の序文で、神も光も暗闇に塗りこめるおろかな考えとして批判を加えられ（12=31）、シェリングは旺盛な出版活動を中断して、ドイツ哲学界の第一線から退いた。ヘーゲルは何もかも同一というわけではなく、対立物同士が打ちけしあうことでそれらを廃棄し、新たな段階を迎えるという生物の成長や発達を考え方をイメージさせる弁証法によって、カント以来の、またそれ以前の哲学の歴史を総合、統合する思考法を開発し、ドイツ哲学の第一人者となる。

先述のようにカントは神の自由に準じて、自ら進んで受け入れる義務である善行を自由の行為と考え、内面化した道徳律に自ら進んで従うという理想的な形の社会統制を暗黙のうちに推奨することとなった。それに対し、フィヒテはフランス革命後の人権状況をも睨みつつ、互いに自由を奪わず、他者の自由を侵害しない範囲に限定された人権を最高法規として明記する憲法観を、シイエスのドイツへの紹介事業などから受容し、より現代の法学思想に近い自由論を展開している（鎌田 2021）。ヘーゲルはむしろカントの理想論に依拠して、フィヒテ的な自由や人権の思想を本来の自由概念からの墮落と捉え、特に前期の著作において激しくフィヒテを批判した¹⁷⁾（Hegel 2017; Fichte 1796=1995）。

ただし共産主義、社会主義の思想家として一派を打ち立てたマルクスの、ヘーゲルは頭で立っているという批判を受けてヘーゲル哲学は過去のものとなり、19世紀末には、ニーチェをはじめとする生の哲学者たちが、真理を提示する思想の体系性を否定し、長大な体系書としての『精神現象学』『法の哲学』は改めて過去のものとされた（Marx [1843–1844] 1956=1959; Heidegger 1971=1999）。さらにヘーゲル思想はナチスの戦争にも利用され、ナチス滅亡後、ファシズム政権に悪用されがちな哲学として決定的に社会的信用を失う（Topitsch 1967=[1973] 1985）。

ここでミードのヘーゲル『精神現象学』受容と普遍志向を考察するため、ヘーゲル自身の絶対的精神に関する考え方を見ておく。ヘーゲルの場合、絶対的精神は自我と他者との出会いを調停する場面で登場する。

だがこの他者は、分別する思想と自分に固定している自独存在〔対自存在、自立存在〕のきびしい態度とを、こぼむことになる。というのも、実際にはそういう自分自身が相手のうちに在ることを直観するからである。後者〔相手、悪〕は自分の現実を投げ捨て、このものを廃棄してしまうので、実際には、一般者となって現われ、自らの外的現実から、本質〔実存〕としての自己に帰る。〔中略〕——和ぎという言葉は定在する精神のことであるが、これは、一般的本質としての自己自身の純粹知を、その反対のなかに、絶対に自分のなかにいる個別性である自己についての純粹知のなかに、直観する。それは相互の承認であり、絶対的精神であるようなものである。(433=下, 266-267)

そして最終的に自然宗教、芸術宗教、啓示宗教をへて、絶対知に至る(514=下, 395)。

ミードは20世紀初頭の段階で、理論物理学における相対性理論による絶対時空間の不可能性の証明や、素粒子論の含意も汲みとり、ヘーゲルのような絶対的精神や絶対知の調停を前提できない立場となり、最晩年の『現在の哲学』(Mead 1932=2001)にも見られるように、共約できない諸個人のパースペクティブがいかに融合しあうのかをめぐる相互作用の理論を模索していた。ミード自身は草創期の状態にある社会学の果たすべき使命、また心理学における構造心理学や機能心理学などの同時代の動向にも目配りして、特にワトソンの行動主義に学び、それを越えた立場を模索して、人間同士の相互作用についての研究を提唱していた。それゆえにブルーマーはミードの逝去後、1930年代に *symbolic interactionist* というレイベルを考案して、ミードをはじめ、トマス、フェアリスらもその名称で呼んだ(Blumer 1937, 1969=1991)。そして、下位集団個々の価値観、下位集団ごとに抽出される「一般化された他者」(下位文化)の研究が要請されていた。晩年のミードはクーリーの考え方を批判した論文で、トマスやパーク、バージェスたちの動向に期待するという発言をしているが、もちろんそれは社会調査を通じた具体的な相互作用の研究に関する期待の表明だっただろう(Mead 1930=2003)。

4. ミードの解決(『精神・自我・社会』草稿検討) ——(シカゴ学派)社会学へ託したもの

ここではミード自身の言葉でその解決がどう語られているかを見る。

公刊された『精神、自我、社会』の終結部分は、それまでの議論をまとめ、相互作用のなかで他者の役割取得をする力を理性と呼ぶといった定義づけの言葉で終わっている(42-14. 12-14なども)。素材になった2系列の講義録の終結部分は、それぞれ普遍宗教(たぶんキリスト教)と(資本主義的経済関係に基づく)民主主義が解決として示されている。フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』(Fichte 1808=2014)では知識学に基づく教育を重視しており、その最終的に目指すところは、概略、ミードと同じだろう。すなわち、社会

のひとりひとりが、キリスト教の、他者の立場に身をおいて考える愛他精神を分けもち、互いの自由を守りあう民主主義の社会を維持していくことで、社会問題にも立ちむかっていける。しかし、社会の一部、特に権力や財力を持つ人々が強欲資本主義を貫くことで経済、生産、物流が混乱し、人々が不幸になるのなら、最低限、独占禁止法のような法律を作って権限の集中を防ぐ工夫も必要になる。具体的に社会の各部分の人々がどのような暮らしや職業道徳を維持しているのかを考察するのが、シカゴ学派以降の社会学だが、こうした研究に臨む場合、神の善意を信じる「理性」の立場からものを見るカントらの姿勢では、頭ごなしの決めつけを含む先入見の永続化にもつながり、逆に有害な場合がある。したがってやはり観念論を離れ、具体的な人間集団の個別研究を奨励すべきだが、公刊テキストでは以下の引用に見られるように、たとえば政党のような具体的な社会の下位集団のなかでの役割取得を語る部分がある。

He thus enters into a special set of social relations with all the other individuals who belong to that political party; and in the same way he enters into various other special sets of social relations, with various other classes of individuals respectively, the individuals of each of these classes being the other members of some one of the particular organized subgroups (determined in socially functional terms) of which he himself is a member within the entire given society or social community. (20-6)

上記に直結する以下の引用文では、下位集団に所属することから、抽象的、普遍的な言説の世界である論議領域（共有意味世界）へと一挙に論じすすむ。

The given individual's membership in several of these abstract social classes or subgroups makes possible his entrance into definite social relations (however indirect) with an almost infinite number of other individuals who also belong to or are included within one or another of these abstract social classes or subgroups cutting across functional lines of demarcation which divide different human social communities from one another, and including individual members from several (in some cases from all) such communities. Of these abstract social classes or subgroups of human individuals the one which is most inclusive and extensive is, of course, the one defined by the logical universe of discourse (or system of universally significant symbols) determined by the participation and communicative interaction of individuals; for of all such classes or subgroups, it is the one which claims the largest number of individual members, and which enables the largest conceivable number of human individuals to enter into some sort of social relation, however indirect or abstract it may be, with one another—a relation arising from the universal functioning of gestures as significant symbols in the general human social process of communication. (20-6)

こうした集団間でのシンボルや価値観の共有から一気に普遍的な価値観の共有に向かう傾向は、彼が論議領域について語っているすべての部分に共通している。論者が探した限り、ミードの公刊された文章で、普遍的とされる意味の共有から普遍的な共有意味世界の

構築へ向かうのではなく、下位集団のなかでの役割取得や価値観の共有だけが語られた文言はない。ただし『精神・自我・社会』の主要な素材となり Mead Papers に収録された 2 系列の講義録を通読すると、1930年講義についての Page Notes¹⁸⁾ (pp. 99-100. pp. 99-102 of the XXVIII 節の一部) に、該当する文言が見出せる。具体例としては野球チームのたとえが引かれ、個人が所属する小集団の態度を取得して行為することが、抽象的に記述されている（未公刊文書としての著作権の問題が未検討なので、訳出は控える）。

すなわち講義録の未公刊部分には抽象的な表現ながら、個別の小集団への加入、そのなかでの役割取得のみを論じている部分があり、これは Page という学生が自分の言葉でミードの講義を補った未公刊文書の一部で、ミードの言葉そのものではないが、少なくとも学生の一部にミードの言葉を小集団での相互作用自体の研究を促すような方向で、受けとめる者がいたという傍証になるのではないかと¹⁹⁾

ミードが下敷きにしたと考えられるヘーゲルの『精神現象学』は、若くして世に出たフィヒテやシェリングのような青年期に発想した哲学とは異なり、30代半ばに他者との相互作用のなかで生きている自我を振り返りつつ、社会的存在としての自己を意識しつつ構想されたものである。3 節の引用文からも分かるようにヘーゲルの絶対的精神も、他者と自我を調停するために依拠されるものである。したがってフィヒテのように神に直面して自我を問う、あるいはシェリングのように一人で神の被造物である自然に囲まれた自我を問うということではなく、人間が織りなす社会関係のなかにおいて自我の立ち位置を考える大人の思想といえるものであり、20世紀初頭のミードが、自身の児童発達理論で参照するにふさわしいものだったともいえるだろう²⁰⁾。

補遺 1. 『精神・自我・社会』での論議領域という言葉の用例について²¹⁾

Kindle の検索機能を用いて『精神・自我・社会』の全文中の universe of discourse の登場節を列挙すると、注も含めて 16箇所（12-13(3回), 20-5, 20-6, 29-3, 33-10(2回), 34-12(3回), 36-4, 36-6(2回), P.II, n. 21, P.IV, n. 15) であり、universal discourse は 4箇所（25-6, 26-4, 34-12, 41-12）であるが、講義録原本で universal discourse とあるところをモリスが universe of discourse に変えている部分、逆に universe of discourse を universal discourse と変えているところもあり、ミードと最初の編者のモリス自身はこの二つの用語をほぼ同じ意味に用いているのではないかと考えられる²²⁾。

現在の情報理論などに応用されている概念は universe of discourse であるが、universe という唯一神の創造的知性が支配する単一の理念空間²³⁾という含意が強すぎるせいか、むしろ domain of discourse という用語で書きかえるようになってきているようだ。そうした置きかえの語義も含めて論議領域という訳語が成りたつのだが、これは「話題になっている対象が含まれる集合や領域」という意味で、社会調査における社会的世界や準拠集団と同根の語義である。ミードが単数形で用いている言葉を universes of discourse として初期シカゴ学派から second Chicago school (Fine 1995) とも呼ばれる SI 論者の作品群の指導理念のように、社会調査の系譜にミードの議論の応用を読みとっていく論者も存在する (Cefai 2015)²⁴⁾。

論者自身は講義録原本まで検討したうえでミード自身は、現実に観測可能な、あるいは

観念可能な宇宙全域まで広がりうる普遍的な意味合いで universe of discourse という概念を用いているように解釈したが、実際にミードが、論理学者の universe of discourse (12-3, P.IV, 34-19, n. 15) と述べている論理学者とは誰なのかが問題となる。

この点については、インターネットの検索でも以下の点が分かる。universe of discourse 概念を発案したのは集合論で有名な数学者オーガス・ド・モルガンとされてきたが、彼はその概念の基になるアイデアを含む文献を公刊しているだけで、実際に universe of discourse という言葉を用いてそれを定義づけたのは、確率論や、こんにちのコンピュータ工学に應用される情報理論の祖となったブール代数の考案者、ジョージ・ブールである (Corcoran 2003; Boole [1854] 1958; De Morgan 1849)。

その定義とされる部分を以下に訳出する。

自分自身の思考と会話する精神についてであろうと、他者と対話する個人についてであろうと、あらゆる論議においてその内側にだけ、その働きの主題が限定されるように想定、表明された限界がある。もっとも妨げのない論議は、わたしたちが用いる言葉が、そのもっとも広い可能な適用範囲で理解されるようなものであり、そうしたものにおいて論議の限界には、宇宙 (universe) そのものと同じ広がりがある。しかしもっと普通には、わたしたちは自分をそれほど広くもない領域に閉じこめている。〔中略〕さて、わたしたちの論議のすべての対象がそのなかにある領域の範囲が何であれ、その領域を論議領域 (universe of discourse) という。(Boole [1854] 1958: 42, 下線は引用者による強調)

この引用文において、ブールの universe は領域、空間という意味でも用いられるが、その広がりのもっとも大きな外延として現実の宇宙そのものに言及する言葉でもある²⁵⁾。現在、宇宙論の分野で「観測可能な宇宙」という用語があり、観測者のいる地球という天体から半径約500億光年ほどの球体がそれと考えられている。宇宙開闢のビッグ・バンのあと、素粒子が原子や分子を形成せずに飛びかうエネルギー濃度の濃い空間において、光が干渉を受けてまっすぐには進めない状態から、中性子や陽子を原子核としてその周りを電子がエネルギーのもやのような形態で運動する原子となり、急速に物質とその周りの空間が分離して光が直進しはじめ、その時点に出発した電波を宇宙マイクロ波背景放射として観察し、発信点との距離が500億光年ほど²⁶⁾というので、その外側に関して知りうる手段は現状では存在しない。しかし、ただ観察できないだけで何らかの空間や状態がその外側に広がっているものとも考えられる。さらに、3次元の空間に時間を加えた4次元時空でわたしたちが活動しているとしても、何らかの別の次元が理論的に考えられる。莫大な距離や未知の次元に属する障壁にさえぎられた異質な多数の宇宙を想定する多元宇宙も構想されており、そうした異質な多数の宇宙を含む空間を megaverse, multiverse と呼ぶ。それゆえブールが構想した論議領域の限界はそうした megaverse, mutiverse を含むものとして考えてもよいのかもしれない。ただし19世紀の数学者であるブール自身は、ニュートンの絶対時空を前提にものを考えているはずなので、宇宙大に拡大して参照される論議領域は単一の原理として、一人の神の言葉に導かれ、支配された領域であり、それ自体が普遍性を帯びた場所と考えられていただろう。

ミードが意識している universe of discourse はブールのそれであり、ゆえにわたしたちの宇宙をその究極の外延とする。しかもミードの構想において、それは universal discourse と同義の普遍的言説を可能にするような領域、空間と位置づけられる。それは、カントが「啓蒙とは何か」で特徴づけた公領域、ハーバースが公共圏と呼んで現代社会で広く言及されるようになった概念の特性と多くを共有するものだろう (Kant 1784=2006; Habermas [1962] 1990=[1973] 1994)。

社会的に重要な論点について、見解を紙に印刷した複数の出版物として閲覧者が参照できる状態で残しておけば、後世の心ある人々の公共の議論にヒントや材料を与えることができる。わたしたち日本人は、たとえばその危険性が長く公刊書で指摘、言及されてきた原子力発電の機構的脆弱性が組織的に無視され、大きな事故も想定外の事態として言及される光景を、目のあたりにした。したがって出版物に表明された見解も、具体的政治場面での公共の議論においては何の貢献もなしえず、出版による言説の普遍性自体も、損なわれやすい脆弱なものだと分かった。そうした事情にくわえて、ミードにせよ、カントにせよ、その思想自体の伝わりにくさは特筆すべきだろう。ミード理解は21世紀のわたしたち研究者に残された使命だが、主に18世紀に生きた歴史的人物であるカントにしても、その超越的観念論や不思議な「物自体」の概念など、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルという後続する3大哲学者がそれぞれ己の知的背景に従ってまったく別様の読み方をして、異なった哲学的言説や視点を構想することになった。彼らは一人一人、絶対者に向かいあう単独者であり、共約不可能なモナドである (Leibniz 1714=2019; Jaspers 1955=2006)。壮大な文書群を残し、大いに議論の空間、刺激を形成して後世の万華鏡のような知的冒険を導くという意味で、こうした思想家の著作はわたしたちの誰もが参照できる知的遺産であり、大いなる宝物庫である。

補遺2. Huebner の『精神・自我・社会』公刊テキストと講義録対照表 (Mead 2015) の修正²⁷⁾

C3=6-7: 1928, pp. 12 (誤13), 14; 12; 8: 1930 (誤1928), pp. 25-26 (誤12-15)

C10=footnote 9: 1930, pp. 59, 56 (誤57)

C13=16: 1930, pp. 78-79 (誤99)

C17=14: 1930, pp.14, 57 (誤1924 Morris “Problem of Consciousness” notes, p. 55); 15: 1930, p. 57 (1930 Page notes, p. 53 [43°]); footnote 31: 1924 Morris “Problem of Consciousness” notes, p. 55 (誤: 項目なし。Huebner の記述より推定); footnote 32: 1930, p. 53 (誤: 項目なし)

C19=8: 1928 transcript, p. 123 (誤: editorial addition と付記); [9 (誤: 節番号欠)] editorial addition

C35=4: 1928, pp. 232-33, 238-39 (誤89); 12: 1928, pp. 236-38 (誤37), 241; 13: 1928, pp. 238. (誤238-39)

まとめ

社会を構成する多様な小集団も、またさらに多様な生育歴、経歴を持つ諸個人も、実は

異なった経験を積みかさねた共約不可能なモノドであろう。そうした個々の小集団、諸個人と交流し、参与観察や聞き取りを重ねて個別の視点から理解を深めていく実存的な社会調査の道には、普遍性の側からアプローチする技法は存在しない。そうしたモノドたちからなる社会で民主主義を形成する道があるとすれば、それこそ公共圏を過信し過ぎない *multiverse of discourse, multiversal discourse*²⁸⁾ であろうし、その一部にはマクロデータの集計で統計的に辿りつけるかもしれないが、そうした *megaverse of discourse* の平均化された特性からは零れおちる個別ディテールや特性は、必ず存在するだろう。そうした残余的な社会的事実から社会変革を促す重要論点を拵いだすことこそ、ドイツ観念論者や、ミードらプラグマティストのような哲学的モノドたちから抽出した社会理論を、役だてる場面となる。

注

- 1) 船津衛氏がSIを日本の社会学界に紹介したころ、授業では大衆社会批判の文脈で考察を加えていたと、東北大学での門下生だった徳川直人氏との雑談で伺った。
- 2) 1990年代に実証主義的なベッカーとポストモダン的なデンジンのあいだに質的社会調査のデータを詩作に活用する技法をめぐる路線闘争的な論争 (Schwalbe 1995など) が生じ、デンジン派はジャーナリズムやパフォーマンス・アートと社会学の相互乗り入れを提唱して、マイノリティの視点を強調し社会的意識の高い芸術活動を奨励する社会学を展開している。
- 3) 20世紀末、論者が大学に職を得た頃、ミード哲学がSIの基礎とされる意味について、改めて考えめぐらし、ブロック大学ホームページのGeorge's Page (Throop, Robert and Lloyd Gordon Ward, 2007, "Project Inventory," Toronto: The Mead Project. <https://brocku.ca/MeadProject/inventory5.html#sectW>. 2021年9月18日閲覧) などのネット上に掲載されたミードの公刊されたテキストを通読して、大学院生時代から興味があったストラウスの社会的世界論に当たるような記述内容を探したが、それはどこにも見いだせなかった。ミードにおいては、*universe of discourse* についての議論が、論者の探求対象に一番近いのだが、後述する理由により、本論ではむしろそこに彼の普遍志向を見だし、初期シカゴ学派やSIのエスノグラフィの考え方とは距離が存在することを強調する。
- 4) ただし、既刊の著作の売りあげを考慮し資金面の懸念から出版は見おくられた (Huebner 2014: 291–292, n. 54)。
- 5) ミードがヘーゲル研究の専門家として捉えられることはあまりないが、その師、デューイがヘーゲル研究から出発したことはよく言及されるし、ミード自身もヘーゲルに関する研究書の書評 (Mead 1901) を公刊している。また『精神現象学』に語られる人間精神の成長の捉え方がミードのプレイ段階、ゲーム段階の考え方に代表される人間発達の視点の原型となっているように思われるという論者自身の読後感も、この推論を傍証するかもしれない。そして記憶の限り、『法の哲学』へのミードの言及は公刊著作には見当たらない。
- 6) ミードが用いているこの言葉の訳語には最近の植木豊氏の論議領域という言葉而当てたが、辞書、インターネット上には、議論領域、論議領域などの訳語もある。ただし、補遺1に述べるようにミードが依拠していると思われる19世紀の用例に対しては、古い話想宇宙という訳語も実は適切だったのではないかと、論者は考えている (Mead [1934] 2015=1973; =1995; =2018)。
- 7) ミードの *self* を報告者自身は「自己」と訳すが、訳本では「自我」とするのが通例となっているので、書物のタイトルとしては「自我」という言葉をそのまま用いる。
- 8) アリストテレス自身も排中律を論じたのと同じ系列の『形而上学』 (Aristotle 1924=1959–

1961) と呼ばれるテキストで、宇宙の究極の原因として「不動の動者」という矛盾許容的概念を提示している。

- 9) 自己は社会的経験のなかで生じる、すなわち、社会的相互作用とともに形成される（『精神、自我、社会』からの引用は、各種の翻訳を参照するのが逆に煩雑に思われるので、英語の原文のままとし、ヒューブナーらの編書（Mead [1934] 2015）で付された章と節番号の組み合わせによって示す。下線による強調は引用者による。行頭の / は引用箇所切れ目を示す記号）。

/The self, as that which can be an object to itself, is essentially a social structure, and it arises in social experience. (18-8)

- 10) 以下の引用句中では、組織された反応を精神としている。すなわち、精神も共同体や一般化された他者の役割取得から集合的に生じる。

/To do anything now means a certain organized response; and if one has in himself that response, he has what we term "mind." (34-10)

/in so far as the individual can take those organized responses over into his own nature, and call them out by means of the symbol in the social response, he has a mind in which mental processes can go on, a mind whose inner structure he has taken from the community to which he belongs. (34-13)

精神、知性は社会状況との関連で進んでいく能力である。

/the actual development of his mind or intelligence itself, given that capacity, must proceed in terms of the social situations wherein it gets its expression and import; and hence it itself is a product of the process of social evolution, the process of social experience and behavior. (P. III, 29-4, n. 27. 注の引用は部、章-節、注番号の組み合わせで示す。)

- 11) ヘーゲル『精神現象学』の、この部分については分かりやすい長谷川宏氏の訳文を掲げる。他の部分では梶山鉄四郎氏の訳文に依拠し、（原書のページ数＝訳書のページ数）の形で参照箇所を示す。

外界が、個人のもとにあらわれるそのままのすがたで客観的にも存在するとすれば、個人を外界から理解することもできる。そのとき、わたしたちの前には二重の画廊があって、その一方は他方の反映とされる。一方は、完全に内容と輪郭の定まった外的環境という画廊であり、他方はそれが意識のある存在のうちへと投影されてできた画廊である。前者は球面をなし後者はそれを一点に浮かびあがらせる中心である。(202=208)

- 12) 二重化された自己意識はしかし統合されたものでもある。多様な状況に応じて分裂していく自我が、その分裂状況を廃棄して新たな統合を獲得していく過程が、『精神現象学』の全文であり、最終的に精神は成熟を重ねて絶対知へ到達する。こうした弁証法の各過程は、生物の成長において幼体から成体に達し、経験を重ねて老成にいたるといった過程になぞらえて理解されるべきだろう (230=上, 396-397)。

- 13) 該当箇所はアンティゴネについての詳細な分析の一部である (289-290=下, 23-24)。

- 14) 英語の mind は魂 (soul) や霊 (spirit) と親縁性がある言葉である。『精神の生態学 (Ecology of Mind)』(Bateson 1972=1991) という書名もあるように、これもやはり集合的なものと考えられてきたのではないか。日本語では psychoanalysis を精神分析, psychosis を精神病と言い、精神を個人の心と捉える言葉の使い方がある。これらも psychology を心理学と訳した例にならない、心理分析、心理病と訳せば筋が通るだろう。mental disease は心の病, mental patients は心の病の人たちだが、この場合も相互作用のやり方の問題に苦しむ人たちとして、むしろ相互作用の病を病む人たちと考えられるのではないか。

- 15) ヨーロッパ中世の普遍論争以来の哲学の志向性が継承されたものだろう (八木 2019)。

- 16) 論者自身、学部生時代にカント以降の哲学書は、それぞれの著者の一神教的な視点との微妙

な距離感を測りかねるため、たとえ読んでも一行も理解できなかった。ただし10数年ほどま
えに近所にあった日本キリスト教会の信者となり、信仰告白、洗礼も経て、アウグスティヌス
(Augustinus [397-400] 1981=1993) および古代から中世に至る異端の歴史なども勉強した結果、
何となくカント以降のものも理解できるようになった。本論での理解はそうした論者自身の自
伝的経験(エピソード)を経たものである。

- 17) 論者自身は現代日本人の視点からむしろフィヒテの考え方に共感する。
- 18) このノーツはシカゴ大学のレーゲンスタイン図書館 (Joseph Regenstein Library) の特別コレ
クション部門に Mead Papers として収蔵されている。研究者ならシカゴ大学に行けば特に制限
なく閲覧できる。1990年代に図書館で作成したマイクロフィルムを伊藤勇氏が購入し、東北
大学関係者の手で PDF 化したものを、論者の同窓の先輩である故加藤一己氏を通じて利用さ
せていただいた。現行の整理番号などとは一致しない順番で収録されているものの、ある時点
でまとめられた図書館収蔵資料が手元にあることは天祐である。関係各位に記して感謝を申し
上げたい。
- 19) Page Notes は1930年度のミードの講義ノートに受講生の Robert Rand Page が自身の解釈を加
えてタイプ打ちしたもので、正確さを期すあまり、ときに冗長とも思われる読みにくい構文が
採用されている。この部分は特筆すべき論点を含まない凡庸な部分で、読みやすくするための
若干の編集も必要になるため本文採用されなかったのではないかと推察される。モリスとペ
イジ家の親密さを含めた若干の背景事情に関しては Huebner (2014:131, 242, 289, n. 42, 43) を参照。この Page
Notes は細かく分けた諸部分が『精神・自我・社会』の3分の1ほどに構成されており、残り
の3分の2の大部分は、1928年の講義について Walter Theodore Lillie と妻の Mary Ann Lillie が
作成した速記録のタイプ原稿である (Huebner 2014:241, 287-288, n. 30)。ちなみに『精神・自
我・社会』にはそれ以外の講義録ノーツも利用されているが、モリス自身が所蔵していたと思
われる分も含め、シカゴ大学に収蔵されていないものは参照していない。
- 20) さらに一般化された他者 (generalized other) の考え方を含めて考えると、それは universe of
discourse や universal discourse の共有が可能になった社会で、人々が社会規範を内面化するた
めに仮想されるプラットフォームと思われる。ところが多くの分裂、分断を含む社会で統一
的な一般化された他者を構想、内面化することができるのかという疑問が、ミード没後すぐ
に T.V. スミス (Smith 1931) により提起された。しかしこれは、そもそも異常心理学における多
重人格や人格障害の研究から I と me にかかわる社会的自己論を構想したミードには、すで
に想定済みの疑問であり、『精神・自我・社会』の本文中の以下のような指摘で答えられてい
る。
/Two separate “me’s” and “I’s,” two different selves, result, and that is the condition under which
there is a tendency to break up the personality. (18-11)
すなわち、場合によっては個人が役割取得によって得た複数の自己像を統合できず、複数の
me や複数の I が形成され分裂したままで統合できないこともある (サルトル的な自己欺瞞
(mauvaise fois) の状況。鎌田 (1997) 参照)。その場合には統合された一般化された他者も形
成されず、複数の完全に一般化されきらない他者像が形成されることになるかと推察される。
- 21) この項は日本社会学会 (2021年6月26日、東京大学オンライン開催) での、本稿の
もとになった発表における寺田征也氏による質問に答えて作成した。発表に含まれていた弱
点を適切に突く慧眼に、記して感謝を申し上げます。
- 22) ただしヒューブナー自身は、こうした「あいまいさ」を指摘したうえで、自分なりに両概念
を対比させるような解釈を提示している。「universal discourse (普遍的言説)」の意味は、「す
べての個人に共有される一組の意味や記号 (symbols) に到達する可能性についての主張」と
される (Mead [1934] 2015:451, 452, 468)。
- 23) 「ヨハネによる福音書」1-1, 日本聖書協会, 1987: 新約163。「初めに言(ことば)があった。

言（ことば）は神と共にあった。言（ことば）は神であった。」（原文は総ルビ）

- 24) 公刊された『精神・自我・社会』（Mead [1934] 2015）の用例をよく見ると、そのうち5例（12-13の2例、20-5, 29-3, PII, n. 21）には a universe of discourse と不定冠詞がついている。したがって、ミードやモリスの意図にかなうかどうかは別にして、単数形の存在から敷衍して複数形の universes とすることも文法的には可能である。universes と複数形にするのは、ベッカーの芸術世界（art worlds）もストラウスの社会的世界（social worlds）も、必ず複数形で考えなければ真意がつかめないと考える文化や世界の複数性の主張と通底する（Becker [1982] 2008 =2016; Strauss 1978）。
- 25) 本段落では主に論者が親しんだ数少ない現代理論物理学、数学の概説書（Tegmark 2014=2016）を、おぼろ気な記憶をたどって参照している。
- 26) ビッグ・バン以降138億年という数値と、それ以来、光速で進む距離の計算が合わないが、それは宇宙空間に存在する物質の質量が及ぼす重力のため、空間が歪んでいるためと考えるようだ。
- 27) C付きの章番号＝節番号：参照される草稿のページ数（ただし1928はLillieの速記録、1930はPageの講義要約）（誤：Huebnerのテキストに見られる修正が必要な文字）の形で示す。章に2箇所以上の修正箇所がある場合は；で連結。
- 28) 多元化された意味世界、多元的言説などと訳せるか（ただし、これは既存の文献で特に思い出せる用例のない論者自身による造語）。

参照文献

- Aristotle (rev., intro, commentary, William David Ross), 1924, *Aristotle's Metaphysics*, 2 vols., Oxford: Clarendon, (=1959-1961, 出隆訳, 『形而上学』上, 下, 岩波書店.)
- Augustinus, Aurelius, [397-400] 1981, *Sancti Avgvstini Confessionvm Libri XIII Quod Post Martinvm Skutella Itervm*, Edit: Lucas Verheijen, Turnholt: Typographi Brepols Editores Pontificii. (=1993, 宮屋宣史訳, 『アウグスティヌス著作集 第五巻 告白録』I, II, 教文館.)
- Bateson, Gregory, 1972, *Steps to the Ecology of Mind*, New York: Ballantine. (=1991, 佐藤良明訳, 『精神の生態学』思索社.)
- Becker, Howard S., 1970, *Sociological Work: Method and Substance*, New Brunswick, N.J.: Transaction.
- [1982] 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary ed., Berkeley: California University Press. (=2016, 後藤将之訳, 『アート・ワールド』慶應義塾大学出版会.)
- Becker, Howard S., Blanche Geer, Everett C. Hughes and Anselm Strauss, [1961] 1977, *Boys in White: Student Culture in Medical School*, New Brunswick, N.J.: Transaction.
- Becker, Howard S. and Michal M. McCall (eds.), 1990, *Symbolic Interaction and Cultural Studies*, Chicago: University of Chicago Press.
- Blumer, Herbert, 1937, “Social Psychology,” Emerson P. Schmidt, ed., *Man and Society*, New York: Prentice-Hall, 141-198.
- 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Berkeley: University of California Press (=1991, 後藤将之, 『シンボリック相互作用論』勁草書房.)
- Boole, George, [1854] 1958, *An Investigation of the Laws of Thought on Which are Founded the Mathematical Theories of Logic and Probabilities*, reprinted with corrections, New York: Dover.
- Cefai, Daniel, 2015, “Social Worlds: The Legacy of Mead’s Social Ecology in Chicago Sociology,” *Joas & Huebner*, 2015: 165-184.
- Comte, Auguste, [1830-1842] 1968-1969, *Cours de Philosophie Positive*, T.1-6, Paris: Éditions

- Anthropos.
- Corcoran, John, 2003, "Aristotle's Prior Analytics and Boole's Laws of Thought," *History and Philosophy of Logic*, 24: 261–288.
- 出口康夫, 2008, 「真矛盾主義的一元論——後期西谷哲学の再構成」上, 下, 『哲学研究』585: 36–60; 586: 24–56.
- Denzin, Norman K., 1992, *Symbolic Interactionism and Cultural Studies: The Politics of Interpretation*, Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Denzin, Norman K., Yvonna S. Lincoln (eds.), 2018, *The Sage Handbook of Qualitative Research*, 5th ed., Los Angeles: Sage. (=2006, 平山満義シリーズ監訳, 岡野一郎・古賀正義編訳, 『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』; 藤原顕編訳, 『同2巻 質的研究の設計と戦略』; 大谷尚, 伊藤勇編訳, 『同3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房. 底本は2000年第2版)
- Fichte, Johann Gottlieb, 1796, "Grundlage des Naturrechts nach Principien der Wissenschaftslehre," Fichte, [1844–1846] 1971, Bd. 3, 1–385. (=1995, 藤津賢一郎訳, 「知識学の原理による自然法の基礎」, 藤澤賢一郎・杉田孝夫・渡部壮一訳, 『フィヒテ全集 第6巻 自然法論』哲書房, 7–456.)
- 1798, "Über den Grund unseres Glaubens an eine göttliche Weltregierung Veröffentlicht" Fichte, [1844–1846] 1971, Bd. 5, 177–189. (=2010, 久保陽一訳, 「神の世界統治に対する私たちの信仰の根拠について」, Fichte, 『フィヒテ全集 第11巻 無神論論争』哲書房, 23–41.)
- 1808, "Reden an die deutsche Nation," Fichte, [1844–1846] 1971, Bd.7, 257–502. (=2014, 早瀬明・菅野健・杉田孝夫訳, 「ドイツ国民に告ぐ」『フィヒテ全集 第17巻 ドイツ国民に告ぐ, 政治論集』哲書房, 5–326.
- [1845–1846] 1971, *Fichtes Werke*, hrsgb., Immanuel Hermann Fichte, Bd. 1–8, reprinted, Berlin: Walter de Gruyter.
- (R. ラウト・加藤尚武・隈元忠敬・坂部恵・藤津賢一郎 (編集委員)), 1995–2016, 『フィヒテ全集』1–23巻, 補巻1, 哲書房.
- Fine, Gary Alan (ed., preface, Joseph R. Gusfield), 1995, *A Second Chicago School?: The Development of a Postwar American Sociology*, Chicago: University of Chicago Press.
- 船津衛, 1976, 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣.
- Habermas, Jürgen, [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuwied (Luchterhand), Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= [1973] 1994, 細谷貞雄・山田正行訳, 『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』第2版, 未来社.)
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich (hrsg., Georg Lasson), [1807] 1907, *Phänomenologie des Geistes*, Leipzig: Dürr'schen Buchhandlung. (= [1966] 1997, 榎山欽四郎訳, 『精神現象学』上, 下, 平凡社; 1998, 長谷川宏訳, 『精神現象学』作品社.)
- [1822] 1970, *Grundlinien der Philosophie des Rechts* (Werke in zwanzig Bänden, Bd.7), Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2000–2001, 上妻精・佐藤康邦・山田忠彰訳, 『法の哲学——自然法と国家学の要綱』上, 下, (『ヘーゲル全集』9a, b), 岩波書店.)
- (村岡晋一・吉田達), 2017, 『ヘーゲル初期論文集成』作品社.
- Heidegger, Martin (hrsg., Hildegard Feick), 1971, *Schellings Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit (1809)*, Tübingen: Max Niemeyer. (=1999, 木田元・迫田健一訳, 『シェリング講義』新書館.)
- Huebner, Daniel R., 2014, *Becoming Mead: The Social Process of Academic Knowledge*, Chicago:

- University of Chicago Press.
- Jaspers, Karl, 1955, *Schelling: Größe und Verhängnis*, München: R. Piper. (=2006, 那須政玄・山本冬樹・高橋章仁訳, 『シェリング』 行人社.)
- Joas, Hans and Daniel R. Huebner (eds.), 2015, *The Timeliness of George Herbert Mead*, Chicago: University of Chicago Press.
- 鎌田大資, 1997, 「自己欺瞞について——他者の感情性の誤解, その理論モデル, 厚い記述, 解釈」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 28: 103-113.
- 2015, 「市民社会, 人権, 公共圏の学としての社会学——英仏市民革命期における二つの思想潮流」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 46: 1-12.
- 2015a, 「コンドルセに由来する二つの遺産——量的, 質的社会調査の発生と展開」『人間関係学研究』13: 51-64. (椋山女学園大学)
- 2016, 「アーネスト・バージェスの博士論文における19世紀の社会主義理解——メソダイズム, 労働組合運動, フェビアニズム」『人間関係学研究』14: 49-66. (椋山女学園大学)
- 2017, 「社会解体論の原点を求めて——原初の社会主義者としてのサン・シモンから初期シカゴ学派が継承したもの」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 48: 175-88.
- 2021, 「ジョージ・H・ミード社会的自己論とドイツ観念論哲学——初期シカゴ学派社会学の忘れられた一側面をめぐって」『椋山女学園大学研究論集』社会科学篇, 52: 15-28.
- Kant, Immanuel (hrsg., Raymund Schmidt), [1781, 1804] 1971, *Kritik der reinen Vernunft*, Nachdruck Hamburg: Felix meiner. (=2014, 石川文康訳, 『純粹理性批判』上, 下, 筑摩書房.)
- [1788, 1790] 1968 (hrsg., Preußischen Akademie der Wissenschaften), *Kritik der praktischen Vernunft; Kritik der Urtheilskraft*, Berlin: Walter de Gruyter. (=1957, 波多野精一・宮本和吉訳, 『実践理性批判』岩波書店; =1964, 篠田英雄訳, 『判断力批判』上, 下, 岩波書店.)
- 1784, “Beantwortung der Frage: Was Ist Aufklärung,” (http://de.wikipedia.org/wiki/Beantwortung_der_Frage:_Was_ist_Aufkl%C3%A4rung%3F, 2021年11月8日閲覧.) (=2006, 中山玄訳, 「啓蒙とは何か」, 『永遠平和のために／啓蒙とは何か』光文社, 9-29.)
- 栗原隆, 2004, 『ヘーゲル——生きてゆく力としての弁証法』日本放送出版協会.
- Leibniz, Gottfried Wilhelm, 1714, “Monadologie,” [1875-1890] 1965, *Philosophischen Schriften der Gottfried Wilhelm Leibniz*, hrsg., C.I. Gerhardt, 7 Bde., Berlin: Nachdruck Hildesheim, Bd. 6, 607-623. (=2019, 谷川多佳子・阿部英男訳, 「モナドロジー」『モナドロジー 他二篇』岩波書店, 11-75.)
- Marx, Karl, [1843-1844] 1956, “Zur Kritik des Hegelschen Staatsrechts (IS 261-313),” Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 1, Berlin: Dietz Verlag, 201-333. (=1959, 「ヘーゲル法哲学の批判からヘーゲル国法論(第二六一節-第三一三節)の批判」, 大内兵衛・細川嘉六監訳, 『マルクス = エンゲルス全集 第1巻』大月書店, 234-372.)
- Mead, George Herbert, 1901, “A New Criticism of Hegelianism: Is It Valid?” *American Journal of Theology*, 5: 87-96.
- 1929, “Bishop Berkeley and His Message,” *Journal of Philosophy*, 16: 421-430. (=2021, 鎌田大資・桑原司訳, 「パークリー司教とそのメッセージ」『経済学論集』97: 1-15. (鹿児島大学.)
- 1930, “Cooley’s Contribution to American Social Thought,” *American Journal of Sociology*, 35: 693-706. (=2003, 加藤一己訳, 「アメリカ社会思想へのクーリーの貢献」, 加藤一己・宝月誠編訳『G. H. ミード プラグマティズムの展開』ミネルヴァ書房, 187-208.)
- (ed., Arthur E. Murphy) 1932, *The Philosophy of the Present*, London: Open Court. (=2001,

- 河村望訳, 『デューイ = ミード著作集14現在の哲学・過去の本性』人間の科学新社, 9-162.)
- (ed., intro., Charles W. Morris, Daniel R. Huebner and Hans Joas) [1934] 2015, *Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist: Definitive Edition*, Chicago: University of Chicago Press. (=1973, 稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳, 『精神・自我・社会』青木書店; =1995, 河村望訳, 『精神・自己・社会』人間の科学社; =2018, 植木豊編訳, 『G・H・ミード著作集成』作品社, 197-602)
- (ed., Merritt H. Moore) 1936, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Chicago: University of Chicago Press. (=1994, 魚津郁夫・小柳正弘訳, 『西洋近代思想史——十九世紀の思想のうごき』上, 下, 講談社.)
- (ed., intro., Charles W. Morris, In Collaboration with John M. Brewster, Albert M. Dunham, and David L. Miller) 1938, *The Philosophy of the Act*, Chicago: University of Chicago Press.
- De Morgan, Augustus, 1849, “On the Structure of the Syllogism, and on the Application of the Theory of Probabilities to Questions of Argument and Authority,” *Transactions of the Cambridge Philosophical Society*, 8: 379-408.
- 森本あんり, 2018, 『異端の時代——正統のかたちを求めて』岩波書店.
- Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph (hrsg., Karl Friedrich August Schelling), 1856-1861, *Friedrich Wilhelm Joseph von Schellings sämtliche Werke, Erste Abtheilung, Bd.1-10, Zweite Abtheilung, Bd. 1-4*, Stuttgart: J. G. Cotta.
- (高山守・松山壽一編集監事) 2006-2011, 『シェリング著作集』1b, 3, 4a, 5b, 燈影舎.
- Schwalbe, Michael, 1995, “The Responsibilities of Sociological Poets,” *Qualitative Sociology*, 18: 393-413.
- 日本聖書協会, 1987, 『聖書 新共同訳』日本聖書協会.
- 清水満, 2013, 『フィヒテの社会哲学』九州大学出版会.
- Siyès, Emmanuel, 1789, *Qu'est-ce que le Tier état?*, Paris: Éditions du Boucher. (=2011, 稲本洋之助・伊藤洋一・川出良枝・松本英実訳, 『第三身分とは何か』岩波書店.)
- Smith, T.V., 1931, “The Social Philosophy of George Herbert Mead,” *American Journal of Sociology*, 37: 368-385.
- Strauss, Anselm L., 1978, “A Social World Perspective,” Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V.1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119-128.
- 1991, *Creating Sociological Awareness: Collective Images and Symbolic Representations*, New Brunswick, N.J.: Transaction.
- Tegmark, Max, 2014, *Our Mathematical Universe*, New York: Knopf. (=2016, 谷本真幸訳, 『数学的な宇宙 究極の实在の姿を求めて』講談社.)
- Topitsch, Ernst, 1967, *Die Sozialphilosophie Hegels als Heilslehre und Herrschaftsideologie*, Neuwied: Luchterhand. (= [1973] 1985, 宇治琢美訳, 『ヘーゲルの社会哲学——救済論および支配のイデオロギーとしての』未来社.)
- 八木雄二, 2019, 『神の三位一体が人権を生んだ——現代思想としての古代・中世哲学』春秋社.